「水土を守る人々」 Vol.13

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。 ※不定期で掲載いたします。

「自然をいただく！発電する用水路」のパイオニア
～各務用水土地改良区 事務局長 波能 寿子 氏～ 岐阜県岐阜市

各務用水土地改良区 波能事務局長

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、各務用水土地改良区で事務局長を務める波能寿子さんです。各務用水土地改良区は、世界農業遺産に認定された「清流 長良川の鮎」でも有名な清流長良川から取水し、関市、各務原市、岐阜市の３市に跨る約560haの受益を潤す用水施設を管理しています。主な管理施設は、用水路25.3km、除塵機５機、揚水機場10箇所で、地区内の多面的機能支払活動組織５団体の事務も受託しています。組合員数は約2,500人で、小林ひろし理事長を筆頭に、波能さんと書記の常勤職員、アルバイト１名の事務局３名体制で、日々業務に取組んでおられます。

1. 事務局長就任に至るまでの経緯

波能さんは、改良区事務のＯＡ化を進めるため、平成20年度より書記として各務用水土地改良区で勤め始めました。

小林理事長(左)と波能事務局長(右)

波能さんが土地改良区（以下「改良区」という。）に入った当時は、賦課台帳などほとんどの書類が手書きだったため、まず４年間かけて、会計システムの導入、組合員名簿など3,000人のデータベース化（納付書から口座振替への切替え）、土地9,000筆のデータベース化と賦課システムの導入を行ったそうです。あわせて、改良

区の紹介や組合員向けの情報を掲載したホームページも開設しました。この取組は、１年でキーボードが壊れるくらい大変な作業だったそうですが、賦課金の二重徴収が解消されるなど、改良区運営が非常にクリアとなったため、非常に良かったと振り返られました。

賦課台帳等の電子化がひと段落した後、東日本大震災を目の当たりにした小林理事長は、改良区事務の合理化により生まれた時間を活用し改良区として新たな活動への展開に取組むため、再生可能エネルギーを活用した維持管理費の軽減、『太陽光発電事業』を実施すべきとの想いが日に日に強くなっていったそうです。しかし、改良区が新たに未知の事業である太陽光発電を推進していくには、土日も返上で何事に対しても前向きに取組めるような熱意が必要と感じ、平成24年４月より新たな事務局長として波能さんを任命しました。波能さんも小林理事長が目指す新しい改良区の将来像に共感するとともに、理事長の熱意に押されて大役を引き受けることになったそうです。

2. 太陽光発電事業への挑戦

白羽の矢が立った波能さんに、太陽光発電事業を推進するに当たって、一番のターニングポイントだった出来事を質問すると、「タマリュウ」※の上部に太陽光パネルを載せて発電所を完成させた、三重県菰野町の専業農家である小椋氏に改良区の役員が研修会で訪問したことを挙げられました。

（※「タマリュウ」は半日影の植物で、通常はわざわざ日影を作って栽培を行います。）

研修会で、「金儲けを考えているなら何も話すことはない。農地を守るためならいくらでも力になる。」と熱く語る小椋氏に農家魂を感じ、役員一同大いに勇気をもらったことで、これまでの意識が180°変わり、地域・農地を守るために是非、太陽光発電を導入すべきとの意見になったそうです。

発電する用水路「各務用水」

その後も「資金問題」、「許認可申請」など様々な課題が山積していたそうですが、持ち前の行動力と丁寧な対応（波能さんは役員等の扱いが上手：小林

理事長談)で、数々の課題をクリアしていきました。波能さんは、「これまでにやったことの無い案件の連続で、真っ暗なトンネルを手探りで歩いている様な感覚で非常に大変だったが、これ以上に面白いことは無い数年だった。」と振り返られていました。”大変＝面白い”と感じられる波能さんだからこそ、未知の取組を推進でき、改良区の役員の皆さんからも親身になって協力してもらえるのだと感じました。

あと、大きな課題に立ち向かった事として、太陽光発電が完成した際に、大々的に新聞やマスコミに取上げてもらい各務用水が有名になったおかげで、太陽光発電施設への課税が話題となり、最終的にかんがい用施設として非課税を認めてもらうのが大変だったと話され、波能さんはこの経験を通して、主張すべきことははっきり主張しないとダメだという事を学んだそうです。「電力料金が値上げされる中、維持管理費のためにやっとの思いで捻出できた100万円がなくなるかと身の縮む思いだった。」と笑いながら当時を振り返られていました。

3. 各務用水を次の世代に引継ぐために

波能さんは、NHKスペシャルで放映された『縮小ニッポン』(番組内で、財政破綻に伴うインフラサービス縮小に悩む自治体の姿などを紹介。)に衝撃を受け、改めて各務用水がこれから直面する困難の大きさを痛感したと話されました。社会インフラ(各務用水)を如何に守り、どのような形で後世に残していくかという、大変やりがいがある大きな課題があると話されました。

「各務用水自然観察会」の様子

今後は、地域の中で改良区と営農が切り離されている現状を解消する必要があると述べられ、「水路だけ守っても、農地・地域が荒廃してしまったら全く意味は無い。施設の管理だけではなく、地域の農業を守っていくのが改良区の使命だと感じている。」「昔は、各務用水で子供が泳いだり魚を取って遊んでいた。しかし、昭和40年～50年頃にかけて『よい子はここで遊ばない！』の標語を筆頭に、”用水路に近づくな！”になってしまった。確かに、些細な事故が死に繋がるので管理する立場としては致し方ない部分もあるが、そのギャップを少しでも埋めて行き、各務用水を地域の宝にしたい。」と将来の展望を語られました。

また、安全を守りながら、子供に各務用水の思い出を残す取組を模索中で、改良

区が地域から頼りにされる存在とならないと、組織として生き残れないと常々感じていると警鐘を鳴らされていました。

4. おわりに

”仕事への取組を支えているのは何か”の問いに対し、波能さんは、「年齢も年齢であり、使命感がこの仕事への取組を支えている。自分が何をやらないといけないのか、何のためにこの組織にいるのかを最近感じるようになった。自分がどのような役割を果たすべきか、先人の志、理事長の思いを感じながら努力していかないといけないと思っている。」そして、「明治24年に完成した各務用水は、125年もの苦難の歴史を乗り越えてきました。偉大な先人たちの開拓者精神を受継ぎ、地域農業と用水を次の世代に引継ぐ目標があるからこそ、頑張ることができ、このような場を与えてくれた理事長に感謝している。」と語っておられました。

最後に、小林理事長は、「お金があってもモノが買えない時代が必ず来る。将来、あの時やっといてもらってよかったなと思ってもらえるよう、そのために今出来ることを頑張らなければならない。」と語られ、波能さんに対し「後ろ向きなことは言わず常に前向きに頑張ってもらっている。改良区として必要不可欠な存在であり、今でも120%頑張ってもらっているが、これをどこまでも継続してもらえるよう期待している。」と激励していました。

各務用水土地改良区の職員の皆様

【東海農政局農村振興部設計課、農村振興局設計課】